

興福寺旧境内の調査

—第371次

1 はじめに

今回の調査区は、奈良市登大路町に所在し、平城京条坊では、左京三条七坊四坪の西北隅、興福寺旧境内の西端に位置する(図144)。江戸時代の『興福寺伽藍春日社境内絵図』や寛政3年(1791)作成と推測される『興福寺子院絵図』によると、調査地は興福寺子院のひとつ、「正法院」の敷地北端にあたる。

発掘調査は、幼稚園園舎新築工事にともなう事前調査として実施したもので、調査面積は88㎡、調査期間は、2004年4月1日から4月26日までである。

2 旧地形と遺構

調査地の地形は、興福寺中心伽藍のある平坦面から、西へ急速に落ちる谷の斜面にあたり、調査前の旧地表面は、調査区東端で標高92.8m、西端で標高90.5mを測る。調査区の東から約5mの地点で、約80cmの段差が認められ、そこから西へ緩斜面が続いている。調査地全体が、近代の大規模廃棄土坑により複雑に荒らされていた。

トレンチ東端では、表土の直下約10cmで礫混じり黄褐色土の地山を検出した。この面から深さ約2mまで、昭和30年代の遺物を含む土坑SK8824が掘り込まれており、残存する平坦面は、土坑縁辺のわずかの部分である。

その西では、比高差約1mの崖が確認された。崖の西も別の廃棄土坑に削平されるが、土坑を掘りきった下

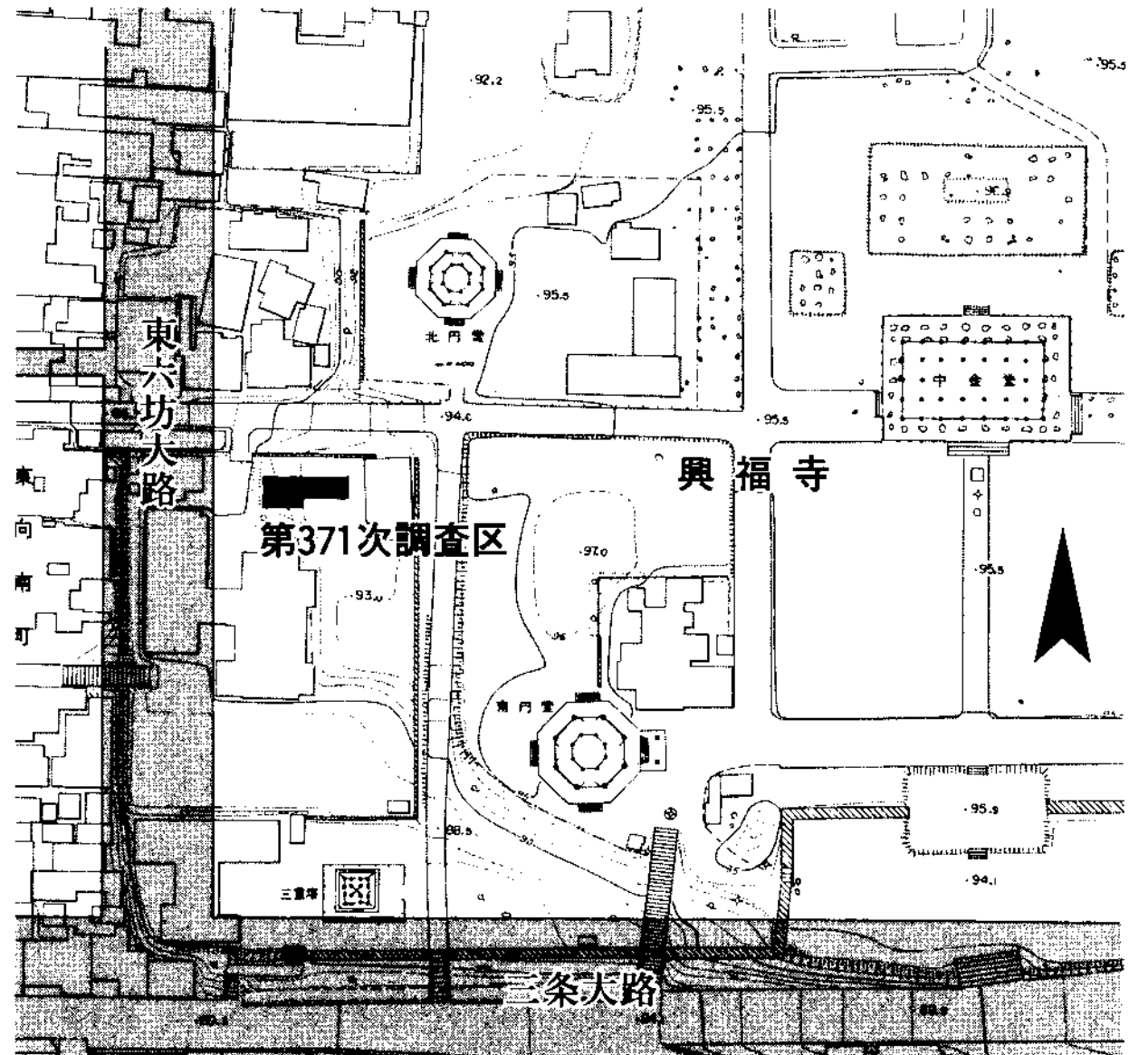


図144 第371次調査位置図 1:3000

で、江戸時代頃の淡黄褐色土の整地層と多数の柱穴・土坑を確認したほか、崖のすぐ西では、16世紀頃から近世までの遺物を含む茶褐色土、13世紀から近世までの遺物を含む茶灰褐色土、黄褐色土からなる3段階の整地層を確認した。なお、検出遺構は、概ね中世以降のものであるが、時期が推定できるものは少ない。

以下、時期の判明する遺構の概要を報告する。

中世の遺構

SD8815 黄褐色土の整地層に掘られた、幅約60cm、最大で深さ約20cmのL字形の溝。南北約1.5m、東西約6m分検出し、西は溝底より低いレベルまで削平されているため、どこまで続いていたかは不明。南は調査区外に続く。敷地の北及び東を限る区画溝と推測される。

SK8816 南北1.4m、東西1.1m、深さ40cmの土坑。13世紀頃の土器を含み、近世の遺物は認められない。

江戸時代の遺構

SX8820 崖の西約0.5mの茶褐色土層で検出した。穴底

| Y-15,630

| Y-15,620

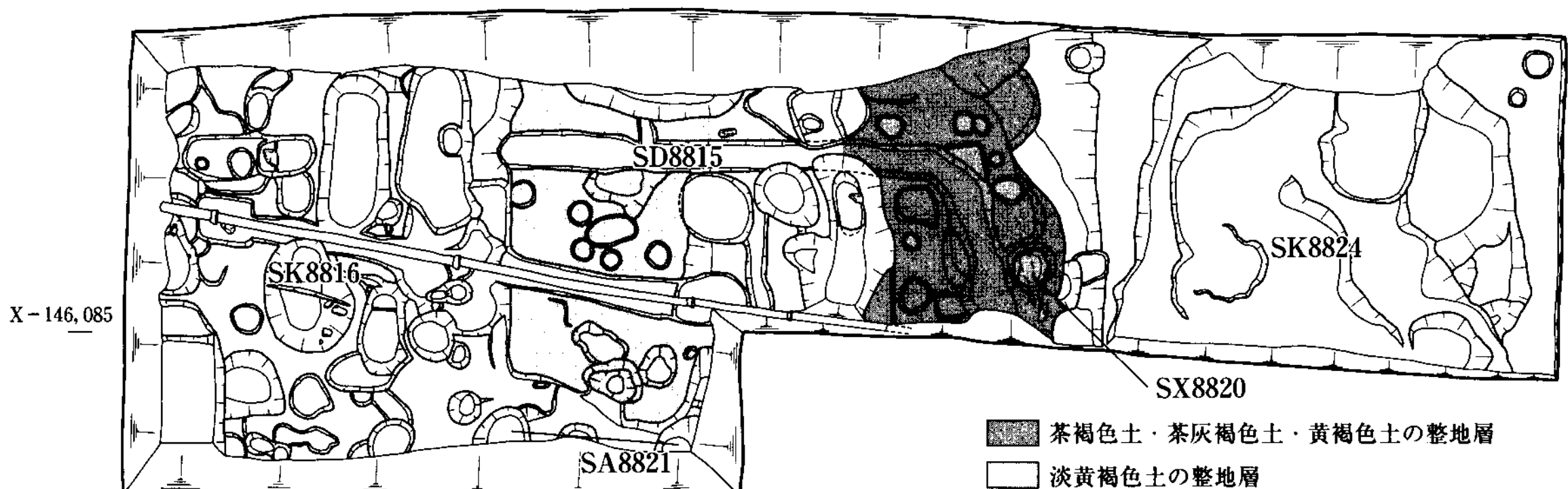


図145 第371次調査遺構平面図 1:125

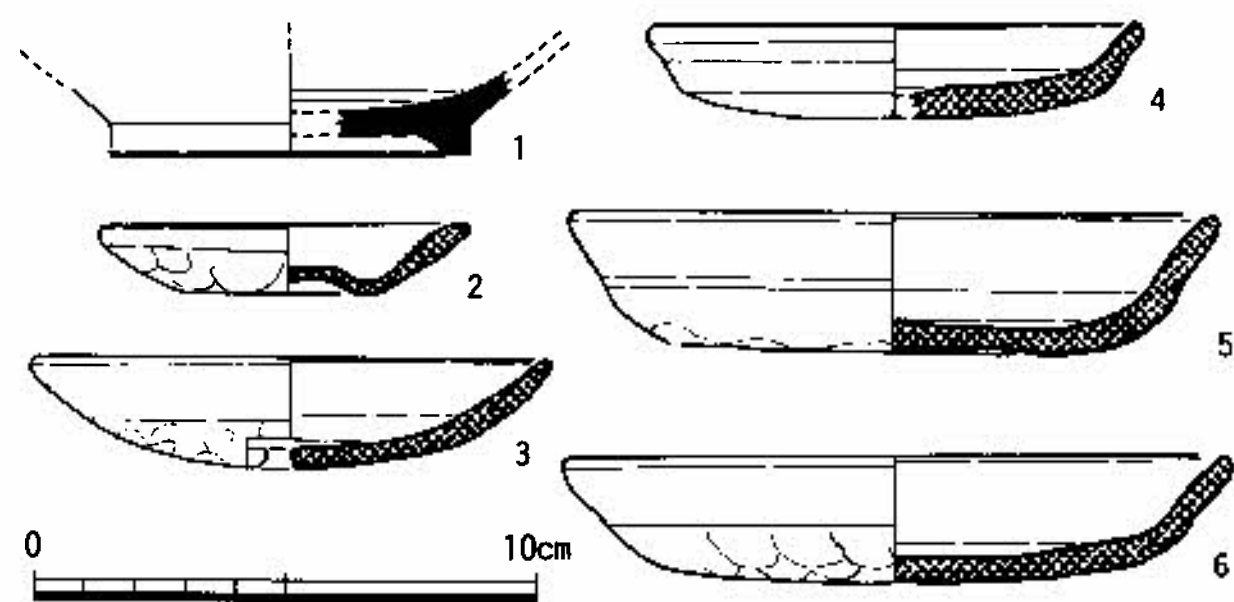


図146 第371次調査出土土器 1：3

に径約40cm、高さ30cm弱の上面が平坦な石が残る。対応する遺構は未発掘区にあるか、削平により失われているため不詳。崖との間隔がせまく崖下の建物は推測し難いため、崖上の建物の屋根を受ける柱にともなうものか。SA8821 調査区南端の壁際で検出した2基の柱穴である。検出が1間分のみのため性格は不詳。（山本 崇）

3 出土遺物

土 器 総数は整理用コンテナで5箱分。うち、包含層遺物は2箱。平安時代初めの土師器、緑釉陶器、中世以後の土師器、瓦器、瓦質土器、青磁、陶磁器などがある（図146）。1が緑釉陶器の椀である。貼り付け高台をもち、胎土は須恵質である。4～6は、SK8816から出土した鎌倉時代13世紀頃の土師器皿類で、大小2種類ある。いずれも1段強いヨコナデが施されており、外面に明瞭に段がつく。これらは斜面地形の整地が最初になされた時期のものであろう。それらを埋め立てた茶褐色土から出土したのが2のへそ皿で、この時期以後の土師器がもっとも多く出土している。3はより新しい時期のもので、底部中央には焼成前にあけられたと見られる小孔がある。（高橋克壽）

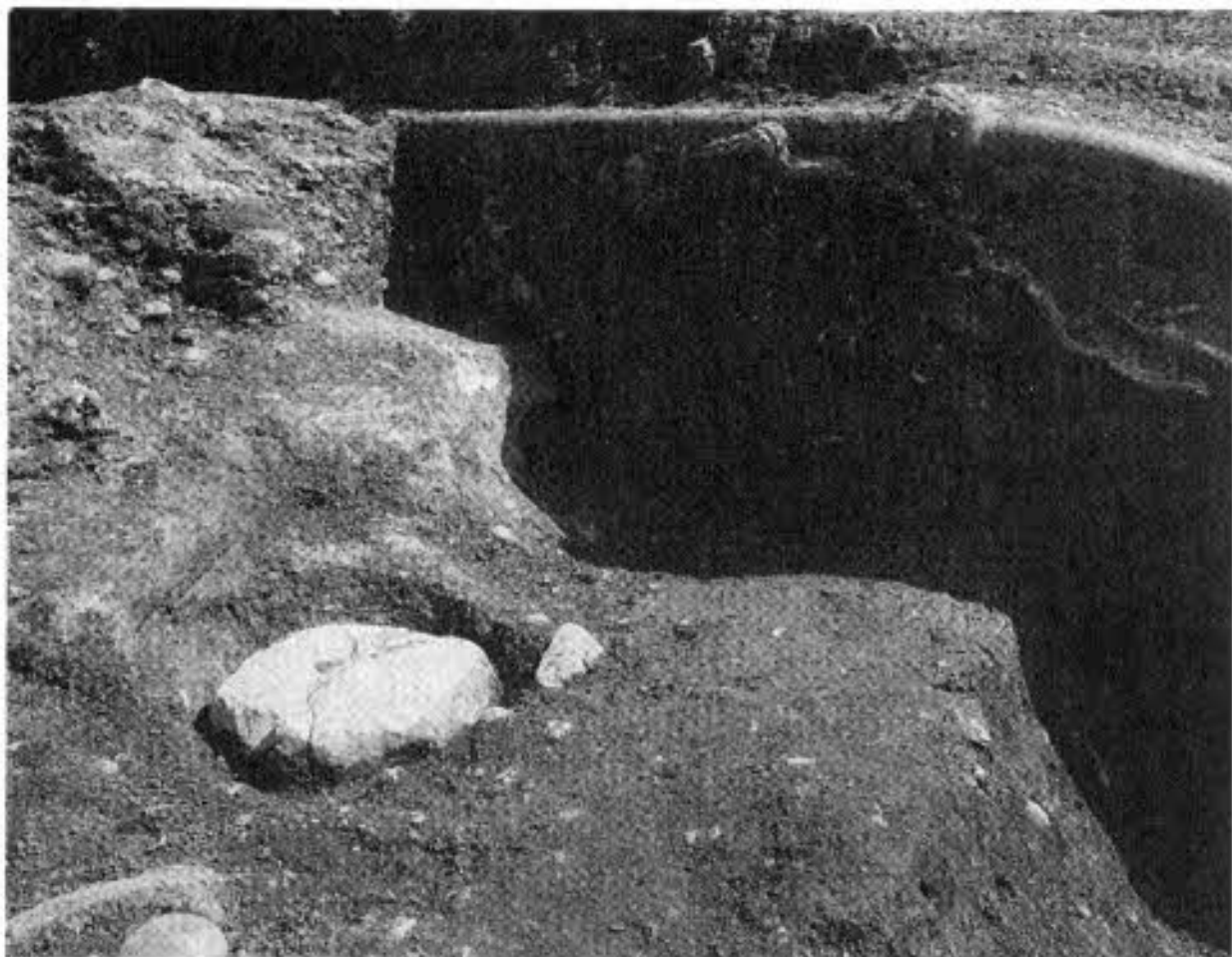


図147 SX8820（北西から）

表21 第371次調査出土瓦磚類集計表			
軒丸瓦		軒平瓦	
型式	点数	型式	点数
6301A(興60)	1	鎌倉	1
平安	1	興811(室町)	1
鎌倉巴	1	室町	3
室町巴	5	中世	1
室町	2	近世	33
中世	1	近世後半	1
近世巴	38	時代不明	1
近世後半巴	13		
近世	9		
近世後半	6		
時代不明	4		
軒 丸 瓦 計	81	軒 平 瓦 計	41
丸瓦	平瓦	磚他	凝灰岩
重量 79.9kg	145.1kg	2.6kg	0.2kg
点数 551	1211	3	1
道具瓦	スタンプ付き平瓦	1点	鳥衾(近世) 2点

瓦磚類 第371次調査から出土した瓦磚類の一覧を、表21に掲げた。出土した瓦の大半は近世のもので、古代および中世の瓦はごくわずかである。また、五輪塔のスタンプが見られる平瓦があるが、これも近世のものと考えられる。（林 正憲）

4 ま と め

本調査で確認された遺構と遺物の出土状況によると、調査区周辺は、13世紀以降、谷地形を整地した上で本格的に利用されはじめたと考えられる。興福寺が中世寺院として発展する過程で、寺域縁辺部の利用がはじまったのであろう。

本調査は、寺域縁辺の利用状況を推測する手がかりを得た点で貴重な成果を得たといえるが、周辺の調査は概して小規模で、全体像は未解明と言わざるをえない。本調査地の周辺においても、なお中世以降の遺構が濃密に分布すると推測され、継続した調査が望まれる。（山本）



図148 第371次調査 調査区中央部完掘状況（北西から）